

西垣千春著

老後の生活破綻

身近に潜むリスクと解決策

「お金があれば安心」

では、
ありません。



認知症、病気、詐欺、事故、子どもの失業——
老後の暮らしはリスクと隣り合わせ。
豊富な実例とともに、解決へのヒントを提示する

中公新書 2121

定価 本体740円(税別)

書評 ↓ 次頁



渡辺純夫著

「肝臓病 — 治る時代の基礎知識」

「肝臓病は治る時代です」が本書の主要メッセージである。順天堂大医学部消化器内科教授である著者のプライベートな体験を所々に挿入しながら、肝臓病の基礎から最新の知識までを分かりやすく説いている。私的なエピソードが親しみやすさを増す。

治療の進歩を簡潔に述べている。「B型肝炎について言えば、診断法、ワクチン、抗ウイルス剤の開発により、新たな患者の発生はほとんどなくなり、薬でウイルスを封じ込められるまでになりました」「C型肝炎もウイルスが発見され、診断法と治療法が確立し、完全に治る時代に入ってきています」と。「不治の病」と言われた肝がんも、外科手術やラジオ波焼灼療法の開発でコントロール可能になりつつあるという。

まず人間ドックの結果の見方や病院に行く際の注意点があり、肝臓の働き、肝臓病の原

因、病態と続く。急性肝炎を引き起こすウイルスA型からE型までの五種類を順に説明し、日本ではB型とC型が一般的だとある。

肝臓病は急性肝炎、慢性肝炎、肝硬変、肝がんと進む。治療法やほかの肝臓の病気にも言及。肝臓病にならないための注意を原因・肝炎別にまとめている。(新書判 二二八頁 七九八円 岩波書店 東京都千代田区一ツ橋二の五の五 電03-5210-4111)

西垣千春著
「老後の生活破綻 — 身近に潜むリスクと解決策」

高齢期には心身機能が低下し、能動的に人間関係を築くチャンスが狭まり、日常生活能力が低下する。セルフマネジメントの能力が失われる。失った能力は別の能力で補うことが必要になる、と神戸学院大リハビリテーション学科教授の著者は分析している。高齢社会の現実を「健康」「家族」「収入」の三つのキーワードで明らかにしていく。

高齢期に陥りやすい危険として、孤立と受動的人間関係による支配を挙げる。このような危険によって生活破綻した十四の事例を紹介、分析しながら解決の方向を探る。

事例に共通しているのは、お金が払えないとか物が買えなくなって初めて現場の福祉職

員と連絡が取れることだ。生活破綻は周りから見えないところで進んでいる。支援サービスにたどりつかないのはなぜかの検証もしている。高齢者の生活破綻を防ぐための取り組みも紹介している。(新書判 二〇〇頁 七七円 中央公論新社 東京都中央区京橋二の八の七 電03-3563-1431)

渡辺 実著

「都市住民のための防災読本」

「二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災はこれまでの防災の前提をすべて覆した」というのが防災・危機管理ジャーナリストの著者の認識である。東日本大震災での新しい事態への対策を取り入れながら、今後の対策を提言している。

将来起こるであろう大震災に遭遇すると、都市では「高層難民」「帰宅難民」「避難所難民」の三大震災難民が発生すると警告。それぞれ「高層難民生き残りマニュアル」「帰宅難民は家に帰るな!」「避難所難民はどうすればよいのか」の章で、具体策を示している。東日本大震災で起こったことは、「新たな震災の顔」として取り上げている。(新書判 一九一頁 七二四円 新潮社 東京都新宿区矢来町七一 電03-3266-5111)

(小川吉造)

新書 解題



猪木 徳

「老いと老後の生活について」論じた新書が目立つ。このテーマが商業ベースに十分乗りうるのは高齢社会ゆえであろうが、老いと死が、時代や文化を越えた人類永遠の難問であることには変わりない。

かつてキケロは、老年がなぜ惨めだと思われがちなのかを論じた。公的活動から退くから、肉体的衰弱を伴うから、ほとんどすべての快楽を奪い去るから、死が近いからの4点を挙げて、それぞれ「惨めではない」と反論を加えた(『老年について』)。深慮は老いゆく世代の持ち前であり、肉体の力ではなく心の力でさまざまな事柄を頭で考える楽しみがある。また老年は酒に溺れるのではなく、節度ある酒席を楽しむ。そして死の接近についても、老年の実は以前味わった善きことの豊かな想い出であり、死ぬもまた、成熟の結果としてよく熟れた果実が木から落ちるよううに自然なことだと語った。現実には、キケロの賢慮を心底から受け入れるのは難し

い。しかし大井玄「『痴呆老人』は何を見ているか」(新潮新書)を読むと、キケロの言へどつながらるような観察と解釈が随所に見られる。「自己とは記憶である」という命題の意味を考え、認知能力の衰えた人が安心できる環境を、愛情と工夫で整えること、「自立性の尊重」だけでは、生命の「生かされる」という側面が無視されてしまうこと

高齢社会「老」への対応

社会的入院、生活破綻を問う

と、「独立した自己」だけでなく、社会における「人と人のつながり」が重要なことが説かれている。認知症の人が人格的なまとまりを持って生きるために、かれらの自我を支える「誇り」や「自尊心」に敬意をもたねばならないと昔の人は考えたという。認知症の人を神の自由な世界に「歩近づいた」(祖霊)のごとき存在だと感じていた

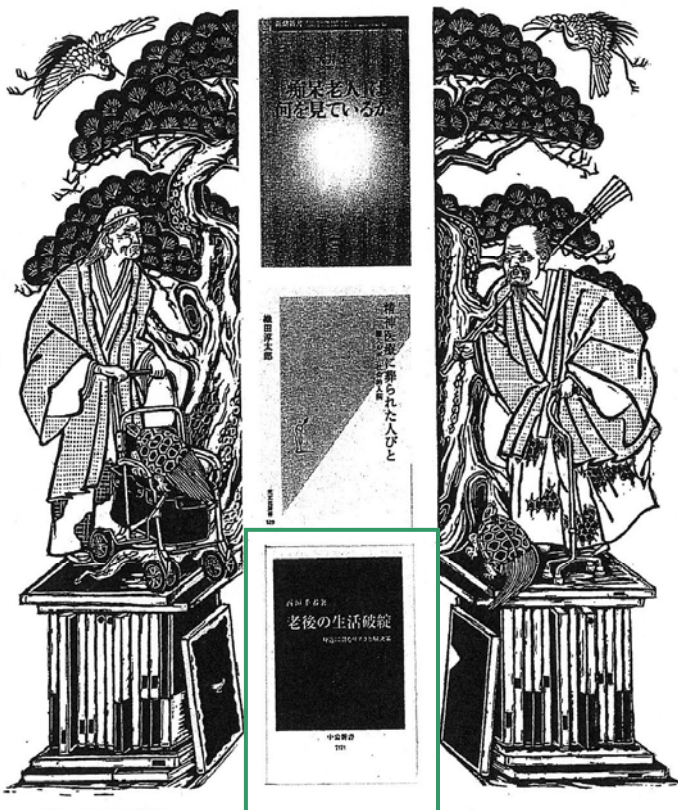
からだ。そうしたタテの「つながり」やヨコの連携の意識を無条件に容認することは、つながりの対象に対して無批判になる危険性があることを認めつつ、大井氏は、もう一度われわれの生存戦略と倫理意識を見直すべきだと提唱している。これは、今回の大震災を機に日本社会に改めて突きつけられた問題でもある。福島原発事故でも表面化し

た長期入院者と認知症高齢者の実態が、織田淳太郎『精神医療に葬られた人びと』(光文社新書)で報告されている。精神医療は、その形も内容も時代や国とともに変わってきたと言われる。ただ単に、不安定だ、落ち込んで、という人間を、近年は社会が薬剤で「患者」に仕立ててしまったのではないか? そんな疑問を持ちつつ、地方の精神科病院に入院することになった著者が収集した症例を読むと、「社会的入院」の問題の一端がわかる。(精神科医療でも訪問診療が始まっていることは、高木俊介『こころの医療宅配便』(文芸春秋)に詳しい)

老い(こと)にも死ぬ(こと)にも経済問題が付きまとう。だが、お金があれば安心というわけでもない。現代日本の経済的・社会的な制度の下で、老後の経済破綻をいかに避けることができるのか。西垣千春『老後の生活破綻』(中公新書)は多くの事例を紹介しつつ、行政と民間の協力の可能性を広い視野から具体的に探った好著だ。

「太陽と死はじつと見つめられぬ」という箴言がある。科学と技術の進歩が生み出した高齢社会は、老いと死の問題を、社会における人の「つながり」を意識しつつじつと見つめ直す機会を与えてくれたと考えられる。(国際日本文化研究センター所長)

* 次回は9月19日掲載、中村彰彦氏担当の予定です。



画・風間サチコ